

學位請求論文は「唐代ノ回鶻ニ關スル研究」と題し、三部より成り、第一篇「唐代ニ於ル回鶻ノ盛衰」は未公表のものであるが、唐代回鶻史を概観したものととして現今もなお學者に有益なるべきを思い、本書に「唐代回鶻史の研究」と改題して収録した。その第二篇は東洋學報に載せられた「九姓回鶻と Toquz Oryuz との關係を論ず」の抜刷に、原稿紙八枚の補遺(二)を加えたものであり、之はそのまま本書に收めた。但し第三篇「回鶻文字考」の未公表稿本は便宜上、下卷にまわした。なおこの外に副論文として「元朝祕史に見ゆる蒙古の文化」が附録されているが、本書では、之は第一群に屬すべき性質のものと考えて前に置いた。寧ろ「漠北の地と康國人」が、回鶻史の研究を補足して第二群に入らるべきものであろう。

第三群は遼・金及び帖木兒關係のものである。遼金と帖木兒とは對象として纏りがないではないかと言われるかも知れないが、共通した類似點は、敦煌・西域の新出史料と無關係な點にある。發表は概ね大正初年であるが、成竹は恐らくもつと早くから胸に藏されていたものであろう。第四群は先生がいよいよ敦煌・西域の新出史料と眞正面から取組まれた後の、零細な史料を生かしての研究であり、本書では「中亞探險」以下の十三篇である。蓋し先生の研究第三期を形造るものである。此等の研究を綜合した「西域文明史概論」「西域文化史」の二名著は、先生が文化勳章を授與され、佛國學士院ジュリアン章を贈られる有力な根據となつたものであるが、既